

日本工学会 CPD 協議会

平成 20 年度第 2 回運営会議議事録（案）

日 時：平成 20 年 12 月 15 日（月） 9 時 30 分～11 時 50 分

場 所：日本工学会 事務所（港区芝 5-26-20 建築会館 6 階）

出席者（順不同、敬称略）：

委員長 桑原 洋
委 員 川島 一彦
関田 真澄
田口 裕也
橋谷 元由
持田 侑宏
事務局 柳川 隆之

配布資料：

SC08-2-1 平成 20 年度第 1 回議事録案

SC08-2-2 CPD WG 活動状況報告（関田主査）

SC08-2-3 ECE プログラムの必要性と要件に関する検討（川島主査）

SC08-2-4 シンポジウム案

議 事：

橋谷委員の司会によって議事が進められた。

1. 前回議事録確認

6 月 24 日に開催された第 1 回運営会議の議事録を確認した。

桑原委員長から、その後に考えたこととして次のような意見が述べられた。

「CPD にはいろいろな目的のものがあるが、十分整理されていない。そのため、十羽ひとからげで扱われている。既存の分野については、その分野の技術者に対して、(1) 大学卒業後の進歩を勉強するもの、(2) 講座はあっても自分では勉強していなかったもの、の 2 つが主な目的である。一方、「融合」については、他分野の技術者を対象として可能性をやさしく教えることが目的であり、こういう目的のプログラムもあってもよい。日本工学会は全体目的を整理して会員学協会に示して、CPD の進め方への自主的な判断をうながす役割を務めてはどうか。」

これに対して、意見交換が行われ、これまでの CPD は確かに自然発生的な色彩があり、日本工学会が CPD の整理につながる考えを世に提示することは意義があるということになった。議論の概要は次の通りである。

- * CPD の背景は研究者の成果を示すということにあり、教育のためという視点がなく、従って、体系化という考えがない。(川島)
- * 研究のためというプログラムは少ないのではないか。(関田、橋谷)
- * 電気では自分の将来のためにプログラムを選択する方向であり、本人任せである。(持田)
- * 教育のためとなれば教科書、手法、手順といったものがあるはずだが、研究のためとなれば教科書は出ているのか？(桑原) ⇒最先端には教科書はない。(川島)
- * CPD の内容の定義を行って、各学会が自身でやっていることの位置付けを把握できるようにして、日本工学会が全体的な方向付けをできるようにするとよい。(桑原)

- * 教育的な CPD が ECE である。(川島)
- * 機械学会では、目的がはっきりしているということで、有料のプログラムのみにポイントを与えている。(田口)
- * 自分の向上を目指しての努力をどう評価するか。CPD の定義はまだない。(川島)
- * CPD が世に認められないのはレベルがばらばらで信用性が薄いせいである。(橋谷)
- * CPD には発展のフェーズがあり、まずは関心を持ってもらうという第 1 段階(研究ベース)から始まって、レベル合わせや体系化を行う第 2、第 3 段階に進んでゆくものであることを考慮すべきである。(川島)
- * 第 1 段階でも整理してみることはできる。日本工学会はプログラムの運営はできないが、このくらいはできる。(桑原)
- * CPD WG の作ろうとしているガイドラインをまずは世に問うてはどうか。(橋谷)

2. CPD WG の活動報告と今後の方向付けの審議

関田主査から、昨年までの覚書を締結するという方向からガイドラインを提示して参考にしてもらうという方向に転換して、外からみえる成果を出すことを目指して活動を行っていることが報告された。これに対して、前項の「全体が見えるような整理」を行うことをどう扱うかについて意見交換が行われ、ここで出された意見を反映して WG での議論を続けてゆくことになった。

議論の概要は次の通りである。

- * CPD を目的別なり何なりで分けるといふ基本を踏んで、分けに応じた対応を考えないと混乱するのではないか。日本工学会としてこうした理念でとらえてゆきたいということを出すためにも各学協会の CPD の分けがまず必要である。このチャンスにそこまでやらないといけない。(桑原)
- * 同じ CPD ポイントでも、知識、実務、貢献などに分類して集積するとどの方向にゆくのかが分かる。(持田)
- * ガイドラインはこうしたことを含んでいないといけない。(桑原)
- * 前文で示す手もある。これから考える。(関田)
- * 日本工学会は全体像を示して、あとをどうするかは強制せずに各学協会に任せればよい。(橋谷)
- * 記録登録の後に来る品質、集積等のガイドラインがポイントである。これから取り組もうとする学協会に参考として役立ててもらうことが目的だが、先行追従にならないようにしないとけない。(川島)
- * CPD の効用は誰が評価するのか？(桑原) ⇒徐々にではあるが、入札条件になるとか資格に結びつけるようになってきている。(田口) 技術者の自己の向上を示す証明として企業が認めてくれるのがよいが、ここに行き着くための種まきとして資格を設けている。(川島)

3. ECE WG の活動報告と今後の方向付けの審議

川島主査から、CPD の 1 つのジャンルとして ECE を提案し、その定義、要件、開発と運用、プログラム例について検討した内容が報告され、今後の進め方(ナノテクのプログラムの具体的実施計画を作る。)について本委員会の判断が求められた。検討の結果、協議会の準備金 300 万円までは使えることを前提に、あとの進め方を提案するところまでを現在の WG で行うことになった。

議論の概要は次の通りである。

- * ECE と CPD 違いは議論があるが、議論は一時棚上げして 2 本建てで進め、お互いが明らかになった時点で、違いを整理してはどうか。(桑原)
- * 当初の人間力の育成はあきらめる。具体的な検討に入るにはお金とコーディネータが

問題である。内容はこの報告のものでよいが、コーディネータは誰がいるか。(桑原)

- * はじめが肝心であり、よい人に参加してもらい、よいというイメージを植えつけて、来年もやろうというようになることが大切である。(川島)
- * コーディネータは企業の現役は難しい。OB となると報酬が必要である。フルタイムで2ヶ月くらいとられる。大手企業を中心にお願いして、しっかりした仕事をしてもらわないといけない。一番大切なのは、第1回に企業からそれなりの人が参加することである。それには期待されるテーマを考えないといけない。(桑原)
- * 日本工学会がやるからにはいろいろな分野が連携するものであることがポイントである。ナノがいい。ただ、CPD 協議会単独では無理であり、企業の肩入れが必要である。(川島)
- * 企業は乗ってこない。国の委託が取れないか。例えば、経産省の大学連携室。立ち上げは2プログラムくらいはほしい。意欲と能力のあるよいコーディネータを探すのが鍵である。市中のコースも調べることも必要である。応募の状況等を通じて関心の度合いが分かる。(桑原)
- * WG の検討は一段落したので、実行の段階に進むかどうかの判断を運営会議でしてほしい。実行へ向けての検討をやるのなら、目標を決めて1年くらいかけて行うかどうか。(川島)
- * あとの進め方について提案をしてもらったところまでやってほしい。これはやってもらえるか？(桑原)
- * 検討してみる。来年度ナノを一つやってみるか、これがリスクがあるのなら、どういうプログラムがあるか、10 コースくらいにばらして、必要リソースを検討することをやる。(川島)
- * ナノでは大きすぎる。MEMS ナノなど絞り込んだ方がよい。(桑原)
- * 協議会の準備金 300 万円を使うことを前提として検討してみる。(川島)

4. シンポジウムの開催計画の提案

川島主査から、両 WG でのこれまでの検討結果を公開するためにシンポジウムを開催することが提案された。審議の結果、時期は5月または6月として、企業からの参加者も含めて、50～60名のシンポジウムを企画することにした。次のステップの提案まで含めるかどうかは、今後検討してゆくことになった。

5. その他

協議会総会は3月に開催を予定する。

以上